

水の一旬

名句鑑賞

水ぐるまひかりやまずよ路の臺

木下 夕爾

路の臺とは、初春 地上に生い出た路の若い花茎のこと。水車が音をたててまわっています。春の太陽に照らされ、水車の水がその音に合わせるかのように光っています。そばでは路の臺が顔を出しました。初春のおだやかな光景です。季語は「路の臺」で、春の句です。



夏の河赤き鉄鎖のはし浸る

山口 誓子

「川」ではなく「河」ですから、運河なのかもしれませぬ。その河に、「鉄鎖」、つまり鉄の鎖の端が浸っているというのです。クレーンか何かの鎖でしょうか。「赤き」からは、鎖がさびているとも読み取れます。見たままを詠んでいるようですが、何となく硬くて重苦しい雰囲気が出ています。季語は「夏の河」で、夏の句です。

さざなみのたたみて水の澄みにけり

久保田万太郎

秋は、夏に比べて大気がさわやかになるので、水も透明度が増します。川面にさざなみが立っていました。そのさざなみがおさまると、水が澄んできたというのです。水面には周りの景色が映っていることでしょうか。季語は「水澄む」で、秋の句です。

冬の水一枝の影も欺かず

中村草田男

池に枯れ木の姿が映し出されています。それを見ると、たくさんある枝のすべてをきちんと映しているのです。作者は、それを「欺かず」と感じ、表現しました。季語は「冬の水」で冬の句です。

文語と口語

「文語」とは「書き言葉」、「口語」とは「話し言葉」を指しますが、同時に、「古語」を「文語」、「現代語」を「口語」という場合もあります。

伝統的に、俳句は「文語」でつくられることが多いのですが、「口語俳句」もつくられています。たとえば、「水の一旬」として、西東三鬼の「水枕カバリと寒い海がある」があります。

「口語俳句」の代表句といっているでしょう。

小中学生のみなさんは、「文語」で俳句をつくることは少し難しいかもしれませんが、「かな」「けり」などの働きを知った上で、ぜひ挑戦してほしいと思います。



ふどもの俳句から

春

わた毛とぶ川のうたごえききながら

小学生
角谷 美保



鑑賞のポイント

☆たんぼのわた毛がとんでいるのでしよう。「川のうたごえ」とは、どんなようすを表しているのでしょうか。その「うたごえ」を聞いているのは？「わた毛」に、春の季節の感じがあります。

春風が魚のように水わたる

中学生
西村 結

☆この句では比喩表現のよさについていろいろ考えてみましょう。「魚のように」というのは、春風のどんなようすをたとえたのでしょうか。季語は、「春風」です。

夏

じいちゃんのお墓に水かける

小学生
新保 研人

☆夏真っ盛り。暑い暑い日でしょう。作者は祖父の墓参りに行きました。お盆かもしれないね。どんな思いでお墓に水をかけたのでしょうか。季語は、「あつい」です。

滝の音しぶきといっしょにはじけてる

中学生
吉田圭内子

☆滝の音を聞いたり、滝のしぶきがあがるのを見たりしていると心が洗われるような感じがしませんか。はじけるのは「しぶき」ですが、まるで音もいっしょにはじけているような感じがしたのでしょうか。作者はどんな気持ちだったのか想像してみましよう。季語は、「滝」です。

秋

川の水もみじをつれてどこへいく

小学生
佐野 夏鈴

鑑賞のポイント

☆紅葉の季節です。川にもみじが浮かび、流れていきます。「もみじをつれて」は、擬人化された表現ですが、ここからどんなことが読み取れるでしょうか。季語は、「もみじ」です

何気なく顔を洗って気づく秋

中学生
黒川 綾子

☆朝起きて顔を洗ったのか、あるいは・・・。「何気なく」という語は、どの言葉にかかるといえるでしょうか。また、作者はなぜ秋だと気づいたのか、考えてみましょう。季語は、「秋」です。

冬

雪だるま溶けた水にも顔がある

中学生
織田 宜行

☆珍しく雪が降り積もったので雪だるまをつくったのでしょうか。ところが、次の日、雪だるまは溶けてしまいました。溶けてしまっても、作者は雪だるまの「顔」を見たのです。作者は残念がっているのでしょうか、それともおもしろがっているのでしょうか。季語は、「雪だるま」です。

春

水たまり空が落とした鏡だね

小学生
小林 佐紀

☆雨上がり。外に出てみたのでしょうか。ところどころに水たまりができています。それを見た作者は、水たまりをどう表現したのか、なぜそのような表現をしたのか、考えてみましょう。

